

1. 暮らし方を見直す

日本列島に住んでいる限りは、自然の恵みとともに自然の厳しき、恐ろしきにも遭遇することになりますので、先人は自然を利用して巧みに共生してきたものと思われま
す。しかし、科学技術が発展し経済が進展すると、自然への関心、動きに敏感になるこ
とが薄れ、利便性が優先されてきたように思います。極端な言い方をすると、いつどの
ような自然災害が来るのかわからないものに集中した対応をすることよりも、とにかく
開発をしながら経済の発展を図るとするのが国是としてきたのだと思います。

その結果、いまやSDGsが大きな目標になるように、われわれの生活環境はこのまま健
全に持続できるかどうかの瀬戸際にあるということでもあります。これには17の目標
があって、それぞれが相関関係にあり、どれも単独なものはありません。かつてはこれ
らの目標は区分されずに存在していたのですが、それが単独なものとして一人歩き
してしまったということです。これ以上、単独行動をしないようにすることが
SDGsの大きな目的だと理解されます。つまり、われわれの行動を一度立ち止まって行
き過ぎていないかを検証する必要があります。自然災害における被害は、自然現象の大
きさにもよるわけですが、その対象は社会問題と深く関係していて、特に、機能(利便
性)とコストという判断基準についての見直しが迫られています。つまり、われわれの
生活するための考え方やツールが、自然のシステムの中で孤立しないで持続することが
出来るのかどうかということになります。自然災害は素因と誘因がありますが、わが国
は災害列島といわれていて、何時でもどこでも起きうる可能性があるので、他地域で発
生するものでも他人事でないということになります。しかし、大規模な災害は頻繁に発
生するものでもないこともあって、自然災害を軽く見ているような気がしています。起
きた時は起きたとき、自分は大丈夫、これまでも経験していない、ということですが、
歴史的にも自然災害は、そんなに簡単な相手ではないということは明白です。

こうなった背景には、地理教育が徹底されていないことから知識が不足して危機感が
薄れていることや、災害列島に居住していることを失念(ボケ)していたりしていること
があげられます。まずは災害に関心を持つこと、他地域で発生したことを他人事とせず、
わが国は自然災害にいつ遭遇してもおかしくない、ということ意識して暮らすことが
必要となります。土地利用も利便性を考えるより先に土地の歴史や自然災害のリスクを
知ることが、その地域の自然災害への備えにつながるのだと思います。これまでの地形
を大事にしてきた歴史地理学の視点からすると、過去のでき事を無視しての、リスクを
潜在させた社会構造になってきたことを一度見直していく必要があると思います。